

平安京と「まじない」

ひとがた —人形—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

名称 「人形」は「ひとがた」と読みならわしており、『源氏物語』(巻13 須磨)にも「…陰陽師め^{おんみょうじ}して、はらへさせ給、舟にことごとしき人がたのせてながすをみ給にも、よそへられて…」という一節がある。また和歌などにも織り込まれていることがある。

材質 木製・金属製・石製・土製のものが出土している。発掘調査などで出土するものは木製人形がもっとも多い。平安時代中頃の法典『延喜式』^{えんぎしき}には材質によって、金銀(塗)人像・木人像・鉄偶人・木偶人などと称している。

平安京で出土する人形はすべて木製であるため、ここでは木製人形について解説する。

形態 偏平な材質に左右に切り込みをいれて、頭・肩・腕・足などを表現しているものが多い。表現方法は正面全身像が一般的であるが、一木を削って立体的な表現をするもの(図1-5)や側面像

のもの(図1-6)もある。顔の表現には多様性があり、線刻を施しただけの単純なものから複雑怪奇な鬼神像(図1-1)までであるが、男性の髭面が多く認められる。これらの顔は基本的に鬼神像を表現しているとされる。なかには女性を描いた例(図1-3)もある。

大きさも全長5cm程度のものからはぼ等身大に近いものまであり、20cm前後のものが多い。

用途 祭祀・儀礼を行なう場合に用いられたもので、他の形代(馬形・鳥形・舟形・武器形等)や土馬・人面墨書土器等と共に用いられたようである。その具体的な方法はよくわからない部分が多いが、(a)人に災いを下すことを神に祈る“呪い”、(b)治療するために病等を人形に転移させる、(c)身についた“罪”や“汚れ”を除くため、祈禱・祭祀を行ない、身体を撫でまわして汚れを人形(撫物・形代・贖物)

に移し付けて自身の身や心を清浄にする、といったことであろう。

(a)(b)は平城京跡等での出土例(図1-7・8)によって断片的に垣間見られるところである。7には目と胸に木釘を打ち、両面に「塚部口建」と墨書する。8には裏面に「左目病作^{合目}」と書かれている。(c)の場合、先ほどの一節の他に「…みし人のかたしろならば身にそへて恋しきせぜのなでものにせん…」(『源氏物語』巻50 東尾)という一文がある。この時期の「ひとがた」は木製ではなく、紙製であった可能性もある(『定家朝臣記』)。その目的とするところは撫物として用いた後、(舟などに乗せて)流し去るという様子が見てとれる。

用例 出土例を検討すると、人形を2枚・4枚と組み合わせている。またこの時、大・中・小あるいは大小の人形を組み合わせる場合と、同じ大きさの人形を組み合



図1 人形実測図

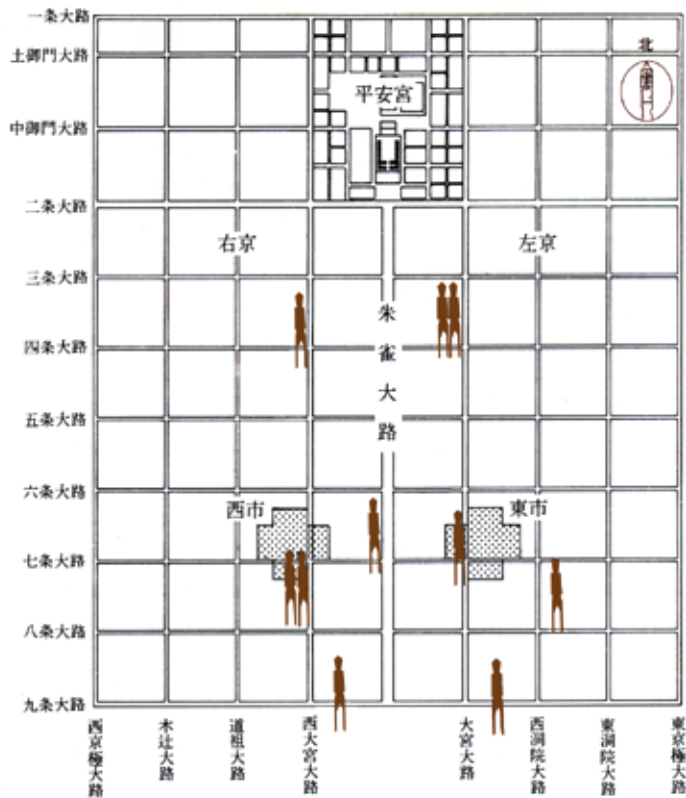


図2 人形出土地点

わせる場合がある。

時期 人形の起源は中国にその例が求められる。古代中国の歴史書『史記』にも土偶人・木偶人等の語がある。長沙馬王堆漢墓^{ちやうさ ま おうたいかんぼ}などでもその例が出土し(図1-9~11)、漢代(B. C. 202 ~ A. D. 8)にはすでに存在していたことを示す。

我が国で発見されているもっとも古い例は7世紀代(飛鳥白鳳時代)の遺物と共に出土しており、8世紀代の奈良時代に至ると飛躍的に出土量が増加する。9世紀の平安時代前期ではやや減少する傾向を示し、10世紀前葉にはほとんど終息する。こうした傾向は日本古代における律令制の成立→盛行→終焉という道筋と軌を一にしており、祭祀の流行もまた時代の動きと大きなかわりがあることを示している。

人形は中世の遺構からも出土し

ていることから後世まで制作されていたことがわかる。しかし、出土状況の変化や横画像が主流であることとその製作手法の違いから見ても、律令期のものとは明らかに異なっている。

分布 人形の分布範囲は北は秋田城跡(9世紀中頃)から南は大宰府跡(8世紀)まで100箇所以上ある。

出土遺跡とその時期との関係は、大宰府では中央と直結した関係にあるため、比較的早い時期の出土を見ている。一方東北地方では1世紀以上遅れて出現する。この時期は桓武天皇を中心とする軍事的事業(征夷)が終わった頃、つまり出羽・陸奥における朝廷の支配が確立した頃と一致することが注目される。

平安京の人形 これまでに平安京跡で祭祀具が出土したのは全体

で70箇所を数えているが、人形の出土は左京5地点、右京5地点、計10地点である(図2)。この数は木製であるために腐食しやすいという点を考慮しても、土馬などの他の祭祀具と比べるとかなり少ないといえる。同時に出土した土器等によって、9世紀代がほとんどで、10世紀前半のものが一部あることが判明している。

人形が出土するのは、平城京跡や長岡京跡では、道路の側溝、特に大路が交差する付近が多い。人形等を使った祭りは8世紀の段階では、かなり規格化されていたようだ。これに対して、平安京跡では、溝・井戸・自然流路から出土し、9世紀に至ると統制がとれた状況がうかがえなくなる。

平安京跡での人形の大きさは12cm程度から36cm以上のものまでである。西市周辺で出土する人形(図1-1~4)は種類・量ともに平安京内で最も多く、バラエティに富んでいる。

まとめ 平安京に見られる人形祭祀の特質は先に書いたように律令制と共に変化していることであり、律令制の衰えと歩調を合わせて消滅してゆく。それは量が減少することだけではなく、平城京・長岡京で見られたような規格性も希薄なことからもわかる。重要なことは国家で管理されていたこのような祭祀が平安宮内で行なわれなくなった点にある。

そして9世紀後半から10世紀前後には、密教・陰陽道的要素をもつ新たな祭祀形態が現出し、人形は変貌をとげてゆくのである。